

〔特集〕

上善は水の如し

——個人史の中で「働・学・研」を決めるとき——

三 輪 昭 子

愛知大学（国際問題研究所客員研究員／非常勤講師）

要 旨

強い意志で「仕事」「職業」「働き方」を考える人は、どの程度いるだろうか。可能性に満ちた未来は、どんなものか。自身を振り返る時の常套句では「人生は成り行きまかせ」。何とかなると自分だけでコトを成すのは難しい。様々な人やモノとの出会いが触媒となり、カタチが出来る。

そんな想いの中で、高校時代に巡り合った一節、「上善は水の如し」。人間も水の如くその状況に応じることが、最も自然な一番よい生き方というものだ。

今回、十名直喜先生の退職記念号への寄稿を機に、「働・学・研」協同の視点を「上善は水が如し」という縫い針で繋ぎ、働く中で発見した「学び」と「研究」について分析・考察する。

キーワード：触媒、上善は水の如し、「働・学・研」、教養教育、非常勤講師

Goodness is like water

The time of deciding to learn and study while working in my history

Shoko MIWA

Visiting Researcher and part-time lecturer
Aichi University Institute of International Affairs

1. はじめに

自分の職業、働く際に強くこだわったのは、性差だった。職業選択で性差がマイナスとならない職業、おそらく公務員と教師、10代の安易な選択だった。社会で働くのは当然、そのため大学の選び。教員養成大学だった。

他方で私は自身を過大評価する部分があり、何でもやり遂げられる力を持っているが性差が影響する仕事に就きたくない。男性も、女性も変わりなく働き、評価される職業に就きたい、その思いがあった。

しかし、私の20余年の非常勤講師としての大学教員の道は、何をしたいのか、何をやるべきなのかと常に自問しながらの、焦りの日々でもあった。そんな生活に終わりを告げる日が来るのだろうかと思っていた頃、愛知学泉大学で採用決定、准教授という職位を得た。

着任を、20代のころ国際交流センター事務室で世話になった小松照幸先生に報告しようと白鳥学舎を訪ねた時、思いもかけないことが起きた。小松先生と私との共通点で弱点は「博士の学位を持っていないこと」。専任教員着任を機に論文博士を目指したらどうか、そんな会話から偶然、研究室に在室であった十名直喜先生を紹介されたのである。十名先生は私を励ますように、優しさと信念を宿した眼差しで私を一瞥、「大丈夫、あなたならできる。そんな顔をしている。」不安の中にあつた私を励まして下さった。けれど、まだ研究は暗闇にあつた。

本稿では、十名先生との出会い前に戻り、私自身なりの解釈で「働・学・研」について考えることから始める。それは、私の履歴書と職務記述書を併存させる形になろう。

2. 研究と職業との共存

2.1 最初のキャリアは修士課程の途上

修士課程に在籍中、無謀にも国家公務員上級職を狙ったが実を結ばず。教員養成課程在籍を利用し、もう教師になるしかない、安易であるが道は拓けると高校教員を選択した。その1年目に紀要の原稿を出してほしいという要望で、修士論文の課題に戻るようになった。

当時の担当科目は「世界史」「現代社会」が中心だったので、学部時代の「エリート理論と民主主義論」を発展させた修士論文「多元的民主主義論」の一部を掲載。当時は、授業実践のための教材研究が日常だったが、学問研究を考えなかった。ただ職業をもって経済的自立をする、それが優先。環境的に「働・学・研」の融合しやすい職務だった。

2.2 日本語教育に関する事務職

元号が平成へと移行する頃、縁あって名古屋学院大学国際センター事務室の臨時職員の職を得た。任期は6ヶ月、留学生別科の開学を控えていた。

当時、事務職に補助的業務のみの職員が各部署に1名ずつ配置、それは女性の臨時職員だった。当時のセンター長、廣瀬鎮先生と小松先生には性差に関わらず、また臨時職員であっても平等に扱っていただき、国際センターとしての今後を考えた準備を進める職務に分け隔てなく参画させていただいた。小松先生には6ヶ月のみで仕事を終えるのは惜しいと私の任期を伸ばす要請をされたが、実を結ばなかった。

そんな折、小松先生からの提案で、(学)河合塾の河合弘登副理事長(当時)の紹介と入社への推薦をいただいた。そのタイミングに留学生別科に類似の仕事に欠員あり。専門学校トライ

デントスクール・オブ・ランゲージ（略称 TSL，以下 TSL）日本語学科の教務職員として採用が決まった。

日本語教育の仕事に就いた頃、日本語ブームの中で1990年には拡大路線にあり、教務職員の職務は教員管理や時間割、カリキュラムに大きく関わるのを余儀なくされた。職務遂行のため日本語教育に必要な知識を得ようと通信教育で日本語教育を学び、講師対応にも活用できるようにした。

2.3 米国派遣の新展開

TSLでの約4年の職務は、私に二つの宝物をくれた。ひとつは、トライデントが語学、経営、コンピュータ、美術・デザインの4部門で構成された教育機関であり、定期的な職員研修から得られた。多様な専門性を活かした研修は「人から学ぶ」経験となった。コンピュータ部門の職員の「理系の人間には文化がない」という発言で、教養教育を強く意識するようになった。

もうひとつは、米国との関わりである。語学学校の一部門である、日本語学科での勤務は英語教育との連携が多かった。英語学科が提携する米国の大学の学生たちに日本での研修プログラムを作る新事業が立ち上がり、米国の大学で第二外国語として日本語を選択している学生を対象とした受け入れプログラムを協働で創設し、その担当責任者に割り当てられた。

その新規事業の成功は、次なる事業、米国の高校生たちが日本語を学ぶ時に使用する教科書開発に発展。教科書開発の主たる執筆者は、出版経験のあるジョン・ヤン先生（故人）を中心に行うよう準備されていた。ヤン先生は中国人で外交官の父を持ち、日本駐在に伴い教育を日本でも受け、博識だった。現上皇が学友であったと伺ったことがある。職務はニュージャー

ジー州のシートンホール（Seton Hall）大学の名誉教授であるヤン先生の自宅兼事務所で、派遣の3ヶ月を大学近隣であるニュージャージー州サウスオレンジでアパート生活を送った。

教科書開発での私の役割は、場面設定と会話集の作成だった。米国の高校生が学校生活の中で出会いやすい場面と様々な科目の授業場面を挿入した会話集を作り、日本語を学びながら他科目を学習できる工夫を指示された。

この業務は教養教育が試され、米国の高等学校の在り方をいかに導入できるかが勘所だった。これには現地校を見学し、学校カウンセラーの役割が生活面以上に学習にも及ぶと教示された。私の創作した場面設定や会話集は編集を重ね、2年ほどの時間を費やしジョージタウン大学の力で、河合塾の著作権を有し発行された。

3. 大学教育とのかかわりの中で

3.1 大学教育の場への転身

私はTSLから米国派遣され、後に東京地区の日本語学校に異動となった。環境変化の中で職務への対応に忙殺させる日常。事務職としていろいろな変化を経験できた幸運な5年を過ごしたが、事務職であり続けることに疑問を感じる日々が始まった。悩みの大部分は、自分自身の目標が見つけれなくなった苦しみ。職務をこなすだけの日々を、どう整理するのか。

その頃、修士課程の恩師の一人が母校の非常勤講師を探していて、私に意向を尋ねた。東京での生活が3年目を迎え、目標を見つけれない日々にあった私は、そのタイミングをつかみ取った。

3.2 研究者を意識する

2019年度前期、名城大学経営学部で非常勤講師として「グリーンマーケティング論」を担当。非常勤講師としての弱さは常に経済的な部分に収斂されるが、その最たる部分は業績づくりの機会を得にくいこと。研究論文を掲載できる場を探すことは重要な仕事の一部。業績づくりをしなければ専任教員になるための審査材料がない。「働・学・研」の融合が近いようで、融合できにくい場でもある。

経営学部で非常勤講師でも論文掲載が可能なものを尋ねると、名城論叢が存在するという。参考のために最新版を拝借。今年度は4名の教授の退職記念号を編集する方針にあった。最新号は、その編集体制にあり、興味をもって退職記念号の杉山清教授の省察文を拝読した。そこには大学の教員であり、研究者である立場から教授自身が読者として一番知りたいことが記述されていた。ここに引用する。

「研究者はどのような理由でそのような思想や価値観に立ち至り、なぜその学問分野に入り、なぜそのテーマを選んだのか。それが研究者が行う内省としての経歴の実態ではないのか」¹⁾

大学教育の現場に転身した私は、路頭の迷子同然だった。

3.3 新たな居場所の模索

母校は教員養成大学。私が非常勤講師として相応しいか否かを教授会で承認を得るため恩師は、「オリジナリティある経験から教材開発が期待できる」という推薦文を添えたので、問題はなかったようだ。

当時の担当科目は、「社会科教育法」、あるいは「公民科教育法」で、小学校や中学校、あるいは高等学校で社会科を担当する際に学ぶ必要のあること、社会科という科目の特性、教材開

発の方法という講義内容が対象だった。ちょうど外国人在住者の子どもが地域で増えたこと、日本人の海外駐在の増加で帰国子女が増えたことを踏まえ、異文化理解や多文化共生が私の前職と関係深いものだった。

それらを研究課題とし自分のものにしていこうと、所属学会も日本グローバル教育学会、異文化間教育学会、異文化コミュニケーション学会を選び、そこでの可能性を模索した。

教育学を土台にした研究は対象者が多く、私の経験が生きた研究課題は見つけにくいと、依然迷子の日々だった。

3.4 経営学との出会い

社会科教員が最初のキャリアである私にとって、経営学は本来そんなに遠い位置にない。学部生の頃は社会科の「法経社教室」の所属で、基礎研究として法学、経済、社会学を学び、専門分野の選択ができる仕組みになっていたからだ。しかし、学部生の頃は経済・経営学に興味がなく、憲法や民主主義思想が自分の方向性に合うと判断していた。

異文化コミュニケーション研究会にはリトリートという合宿形式の勉強会があり、名古屋から参加した企業人に会う。彼女はTQCに関わる職務に携わり、トヨタ系の会社で異文化関係を扱っていた。名古屋に面白い試みをしている団体があるという。それが後のNPO法人パートナーシップ・サポートセンター（略称PSC、以下PSC）で、企業とNPOとの協働事業を支援、パートナーシップづくりへの貢献をミッションとしていた。

4 研究課題の変容

4.1 現状打破の嚆矢

私を大学教育の場に誘った恩師は、非常勤講師としての働き方しか巡ってこない私を心配し、核となる研究課題をつくるよう博士課程への進学を勧めた。経済的余裕がなかった私は、経済的不十分さを補うために自分のできそうなことは何でもやろうと決意し、客観的に専門性がないような科目でも多少の関係性があれば授業担当はできると、様々な科目を同時展開させるようになった。多い時には1週間は5日間の稼働であるが、6大学で別科目の教鞭をとることもあった。まさに、上善は水の如し。可能なことは何でも担当した。

専任教員になれない理由を「専門性がわかりにくく、何者かわからない状態」にあるから、核となるものを見つけ確かな専門性を樹立せよと、恩師の一人から忠告されたことが気になり続けた。継続的に大学で博士課程を修了し、助手、講師、准教授、教授とステップを踏む余裕がなく、外部から新規参入した私は、まずは生活費獲得のため、米国在住のパートナーとの時間的共有を得るための渡航費を獲得するため、コマ数をこなすことが避けられなかった。

そこに、恩師、夙住忠久先生からの激励「書籍出版」を提案される。テーマは、以前視聴した映画のことが忘れられず、これこそ私のテーマと考えたもの。企画本の構成案と依頼を出したい出版社を検討し、提案いただいた恩師に相談した。その後、出版社への繋ぎ役をして下さり、何とか出版へと進められた。

『映画で地球を読むー地球市民のための教養講座』、これが拙著第1号の単著となった。

4.2 NPOとマーケティング

PSCの活動に関わり、パート勤務で事務仕事をするようになったのは、2000年度を迎える頃である。その年度の活動キーワードが「評価」で、前年度に国際交流基金、日本財団の助成金給付が決定していた。

特に国際交流基金助成事業では、「NPO評価と企業評価ーその社会的責任ー」という評価に関わる知見を学ぶためワシントンDCとニューヨーク市両地でのスタディツアーの企画担当となり、両地のNPOや企業財団を訪問するツアーの引率・世話役として携わり、後に成果物をまとめる作業として報告書と映像資料の編集を行った。

訪米は研究の分岐点だった。スタディツアーの取材で、アメリカンエクスプレス社を訪問した時、評価に関連した部署の担当者から、社会貢献をマーケティング活動に取り入れたコーズ・リレイティッド・マーケティング（cause related marketing）は当社が最初に考案し実践の一人者であると紹介された。

帰国後、国際マーケティングの研究者、丸谷雄一郎さん（当時、愛知大学経営学部、現在は東京経済大学所属）がスタディツアーの取材に興味をもち、すぐに研究論文に活かすべきだとアドバイス。愛知大学の経営学会での講演会を設定、『企業とNPOのコラボレーション 企業の新しい戦略』を演題に講演が実現。加えて、共著で研究ノート「コーズ・リレイティッド・マーケティングーアメリカにおける概念と実態」、論文「コーズ・リレイティッド・マーケティング概念の方向性」を執筆する道筋ができた。この2種類は共著であるが、私自身の文章を丸谷さんが内容確認と意見を加え、編集する方法で、成果を残した。後、私は愛知大学附属国際問題研究所の客員研究員に登録、研究発表の場

となった。

4.3 雑誌「オルタナ」とエシカル企業

経済誌を読む機会が増えるようになった。経済学に関しては学部や修士課程で学ぶ機会があったが、基礎・基本以上に時代に応じたものが必要だった。不案内のところがあった。

興味ある分野が掲載されている雑誌の中で一風変わったものを発見、それが『オルタナ』であった。企業の社会貢献の関連、良心的な創業者の理念・ビジョン、まちづくりや消費動向まで扱うような内容で、ちょうど私が経営学にシフトし始めた頃はCSR元年としてCSRが注目されていたこともあり、興味深く目を通すようになり、その後、定期購読している。

PSCは企業とNPOのパートナーシップを支援するミッションの下、パートナーシップ大賞という顕彰活動を実施、その審査員に雑誌『オルタナ』の編集長の森撰さんが加わった。

オルタナは7周年記念のイベントとして、2014年7月に英国エシカル企業視察を企画。個人的に「エシカル企業」という表現が気になり、探究をスタートさせた。企業視察では、特にエシカル企業として名高い「ボディショップ」が創業時から企業倫理が貫かれ、模範となっていることや、「マークス&スパンサー」ではCSRを担当部署だけでなく、全社でCSRが自分ごとになるよう社員教育を行っていることを学んだ。この視察旅行のコーディネーター、下田屋毅さんとの交流も始まった。

その後「エシカル」という用語の調査、エシカルを文脈とした企業論や消費者教育に関する方向へと舵を切り、やっと自身の研究内容的を絞る時がやってきた。

5 著書づくり

5.1 エシカルにこだわった5年間

「エシカル」という言葉が日本でトレンドになる萌芽は出始めていた。参考文献を探し求める過程で、関連の文献はないに等しかった。やっと見つけたのが、デルフィスの文献。

デルフィスはトヨタ系の事業開発・ブランディングの会社である。エシカル調査を行ってきた担当者、細田琢さんは「エシカル」な知見を通じての講義、彼を中心に執筆、編集された著書『まだ「エシカル」を知らないあなたに』は興味深かった。

ちょうど消費者庁で「倫理的消費調査研究会」の動きがあり、一般社団法人日本エシカル推進協議会（略称JEI、以下JEI）が発足。早速JEIの会員団体になった。このころからエシカル消費や倫理的消費に関する内容が、少しずつ外に出始めてきた。「エシカル」という言葉が一般的になる前に、私は「エシカル」研究の第一人者になりたいと切望するようになった。

発足記念シンポジウムを2016年に行ったJEIは、翌年の2017年7月にエシカル教育を普及させるためのワーキンググループ（WG、以下WG）を結成。招集のきっかけは、発足時のアンケートに参加希望のWG調査があり、私は教育にチェックを入れていたからだろう。

1ヶ月1回ペースで集合し、エシカル教育のブックレットを作成するのはどうかと、勉強会のようなものが開始。2017年7月から、必要に応じ不定期に続いている。

5.2 エシカル消費とSDGs

エシカル教育のブックレット開発検討会は膠着状態にあったが、それに再起動がかけられた。ブックレットの内容や編集方針が決まらないな

らば、サーベイを開発した方が有益だという提案がメンバーの一人から出された。

サーベイへの回答者たちが残したデータがエシカル教育の成果につながるのではないか。そのサーベイの結果を解析する際、明確な指標があるべきだとの考えからSDGsのことを理解できているか、行動に移すことができているかと、確認していくことで、学習力、想像力、情報力、行動力、達成力という指標の結果を出すよう設計されることになった。

エシカル消費はSDGsの各目標の達成を実現できる。ここを教育WGの共通理解としてサーベイを開発する事業が始まった。WGのメンバーは、質問文と回答の結びつきを紐づける基本的部分からサーベイの動作について確認作業を継続的に行った。

5.3 タイミングとテーマ

2014年から継続的に「エシカル」概念を考える日々区切りをつけ、エシカル概念について研究論文を残そうと決意。2017年からJEIでの教育WGでの勉強会のような打ち合わせが、まとめるべき内容を教えてくれていた。

また、2015年からフェアトレード（略称、FT、以下FT）を学ぶ努力もした。名古屋市がFTタウンに認定されるまでの市民運動について学び、また他地域のFTタウンの動きについて文献探索しながら、時には現地で学び、2016年には勤務校、愛知学泉大学の提携校のひとつ、カナダのキャピラノ大学で客員研究員として3週間の滞在の権利を得て、FTタウン認定都市、バンクーバー市について調査した。

2017年3月、所属の現代マネジメント学部を募集停止する決定がなされ、私自身の任期の区切りが2018年3月であることを意識し、退職までの期間に研究論文をまとめよう決意

し、2本の論文をまとめた。ひとつはCSRに関するもの、もうひとつは「エシカル概念」に関するものである。

2016年7月から十名先生の産業システム論のゼミに参加していたが、私の研究課題は混迷状態が続いた。

5.4 代表作づくり

愛知学泉大学を退職し、2018年度から名古屋市内の大学で非常勤講師として勤務する日々が始まった。JEIでの活動は継続していた一方で、エシカルの考え方を広めようという結成しコンサルタントを目指した任意団体エシカルインスティテュートなごやでは代表が交代。変化の兆しが起きていた。

8月下旬、消費者庁から「エシカルラボin山口」での基調講演での登壇を依頼される。エシカル消費普及の継続的イベントだった。JEIの副会長で、教育WGのリーダーであった中原秀樹さん（現、JEI会長）が山口市での基調講演に私を推薦、エシカル消費に関する仕事のスタートとなった。

5.5 『身近でできるSDGsエシカル消費』の誕生

2018年10月中旬、突然の電話で書籍執筆の依頼が飛び込んだ。さ・え・ら書房の編集者から電話とメールを受信。同年8月のSDGsに関する書籍の出版が好評で、続編を企画中という。

突然の電話、執筆の依頼、企画案は私の研究論文の内容が使われていた。怪訝な想いでメールの文章を読んだ。編集者は、消費者庁主催「エシカルラボin山口」での私の登壇予定をつかんでいた。「エシカル消費」に関する研究論文を読み、私に『身近でできるSDGsエシカル消費』の執筆を依頼するに相応しい人材と考えた

ようだ。

2019年度の注文中に間に合わせたいと検討を重ねた。十名先生のゼミでも話題にし、多くの方にアドバイスをいただいた。

その後の努力は時間との闘い、約6ヶ月を編集部と役割分担で記述し、写真の許諾と進め、2019年5月に全3巻の『身近でできるSDGs エシカル消費』が完成、発行となった。

個人的見解でもよくできていて、大人でも読み応えのある労作となった。間違いなく生涯の代表作となるだろう。

6. 上善は水の如し

30年近く大学教育の場に居ながら、当初は研究について真剣に考えず「成り行き任せ」であっても、その時々の研究課題は見つかった。授業科目が研究課題に重なる。基盤となった学問が教育学で、教育現場で教材開発する方法論から出会う社会的事象で、研究の道を切り拓くことができたのではないかと分析する。

研究課題の候補に出会うと、そこには触媒となる人物との出会いが用意されていて、課題の使い道を教えてくれた気がする。

「何が専門領域か分からない」というより「上善は水のごとし」。私は水のように流れ流れて器の形にカタチを整え、研究課題を作り上げ、現在まで継続ができた。

いろいろのきっかけを下さった方々に感謝の意を伝えたい。攻め時だという時間的タイミングを感じて行動したが、それは「働・学・研」の融合に流れた水の意味によるものだろう。

注

- i) 杉山清「研究者への軌跡の三省察—法政大学社会学部から同大学院までの経緯の寸描—」『名城論叢』第19巻第4号、2019年3月

業績一覧

主著（単著）

『映画で地球を読む—地球市民のための教養講座』黎明書房、2009年10月

『身近でできるSDGs エシカル消費』全3巻、さ・え・ら書房、2019年5月

共著

『グローバル社会入門』黎明書房、1997年4月

学術論文

「アメリカにおけるエシカルという指標の動向—消費者選好とCSRを強化する試みに注目して—」愛知学泉大学現代マネジメント学部『現代マネジメント学部紀要』第3巻第2号、2015年3月
「エシカル消費で社会が変わる—エシカル消費を支える見方・考え方の探究」愛知学泉大学地域社会デザイン総合研究所紀要『地域社会デザイン研究』第6号、2018年3月